

THE GOOD LIFE

THE GOOD LIFE

ART

Artful Prague

眠れるアート心を呼び覚ます旅

エミリー・ヨッフエ

子供時代、私はアートが大好きだった。自宅は私の専用ギャラリーと化し、陶器や絵画、彫像といった作品を所狭しと飾っていた。だが大人になって、私は創作活動と距離を置くようになった。昔の睡前を取り戻そうと教室に通ってみることもあるが、出来上がる作品は画を導うことにつまらなくなっていく。眠ってしまったアート心に再び火を付けるにはどうしたらいいのだろう。

そこで私は「アートの旅」に出ることになった。遠い異国の地で絵画や陶芸、彫刻、織物を体験できるツアーはいろいろあり、特に人気があるのはフランスのプロバンス地方やイタリアのトスカナ地方への旅だ。だがあんな風光明媚な土地に行ったら絵を描くよりも外を歩き回りたくなるに違いないと思った私はチェコの首都プラハに行くことにした。小説家カフカが「変身」を書いた街だ。

チェコはオーストリアやドイツ、ソ連による度重なる侵略を受けてきた小国だ。到着した日、プラハはどんよりと灰色に曇っていた。それでもこの街にはおとぎ話を思わせる美しさがあり、私は感銘を受けるとともに胸が高鳴った。

私が参加した6日間のアート三昧の旅のプログラムはなかなか魅力的なものだった。午前中はアトリエで美術の制作を行い、午後は観光、晩にはコンサートやバレエ

プラハの街は何度も周辺の大国の侵略を受けてきた。だから人々は目立たないことをよしとしている





動物のイラストレーションや面白い
コトアートの制作に行き届くのはこ
れまでになかった力量が得られるか
らではない

ここでは作品は自然と
アトリエの外に広がる
街の影響を受ける
ブラハの街そのものが
芸術作品と言ってもいい
力強く喜びに満ちた
何かを作りたいという
人間の衝動を感じる

といった街が影響を及ぼす。一
階に移動したのは30代のニューヨ
ーカーで、彼はプロダクションのレ
イナルと、時代のオーソドックスな
ア人で、建築材が専門の技術者フラ
ンチェスコだ。

初日の朝、場所は私たちの前に
精上の魂を一つずつ置いた。そし
て私たちに目撃しをした。手で触
れた感覚だけで自分たちの顔の像
を作れというのだ。これまでこの
手のクラスを受講するたび、私の
右腕と左腕はけんかを繰り返して
きた。建築の過程で完成の境地に
陥りかけると右腕は大笑び、だが
左腕は「こんなのは時間の無駄
だ」と文句を言う。今回も粘土を
こねながら私は、左腕に「黙って
いろ」とひたすら言い聞かせてい
た。授業が終わる頃には、私の前
には不格好ながら何となく私の顔だ
と認識できる作品が出来上がって
いた。何かを作るためにまとまった
時間を費やすことができたのが

とてもうれしかった。

2日目の課題は、コマ回りでア
ニメーションを制作するというも
のだった。床には大きな白い紙が
敷かれ、その上には二階でカメラが
固定されている。

自作の出来栄に感動

私たちが人は床にはいつくばり、
紙一面に小支那をまいた。そして
指で小支那をなぞって線を引いて
いく過程を何十枚もの写真に撮ら
れ、バラバラ世界の要領で描いた
線が動いて見ると、というわけだ。
私は毛繕いしている線が尻尾を振
る様子を見せられるつもりだったが、
時間と自分の腕に驚かされた。アニメ
作家より早く、指でなぞる手が回
らず動かない。指を伸ばすところ
しか描けなかった。

4日目の朝、私たちは紙の十層
層であるリチャードの巻を巻いて
厚紙にスケッチした。次に講師の
指示で、鉛筆で描いた線をナイフ
で彫る。それから種物種で彫った
黒と青の線の具をはら毛布で磨り込
んだ。すると線の具は彫った紙に
染み込み、厚紙はメタリックな輝
きを放つようになった。あまりの
出来栄の良さに私は感動した。
美術と縁を切るを自分の身に受けた
かのように感じた。

翌日、私は同じ手法でもう一枚
今度はカメラの自作回を撮ること
にした。そして撮影したことで丸
3時間もスケッチを続けていた。



レイナルドはプラハの右側に着意を得た建築家と聞いており、フランチェスコは左から見たプラハの街をサンペラを使って描いていた。ここでは、作品もアイディアも自然とネトリエの外に広がる街の雰囲気を受ける。プラハの街そのものが芸術作品で言っている。この街はさまざまな素材をもとに力強く作り出されたものを作り出したという人間の営みに彩られている。石造の暖房にしても建物のてっぺんの装飾にしても、これほど多様で異なる建築とデザインを組み合わせたのはこれまで見たことがない。インスピレーションをそよめられるのは街の美しさだけではない。手入れされすぎず人ではいるが定歩作りの建物を時々見受けられる。社会主義体制が倒れた頃は街じゅうの建物が人々を驚かしたという。資本主義になって最も変わったのは建物の装飾だというジョージアがあるくらいだ。

もう一回挑戦したくなる

ただしおしやれになったのは建物のだけ。結局的に地元の人々は服装も行動も極めて地味だ。熱帯気候でも靴下も履いていない人も、髪も本を洗っていない人も、はは笑んでいる人はいない。これは歴史の中で身に付けた習性だ。「目立つたり、注意を引いたりす

チャードは言う。

プラハ城内にある国立美術館で19世紀の絵画や彫刻を見た後、わざとでなければこんなひどい作品は作れない……と誰もが思うはずだ。ガイドのナキサ・ストゥクタはくすんだ風景画の画で立ち止まっていた。「遊覧にチェコらしい絵が使われています」と解説した。もしかすると機軸も絵師者に変われば、価値あるものを奪われてきたせいで、誰にも認められない絵を描いたのではないだろうかと思った。

一方、美術館のあるプラハ城は昔やがて壊された建物だ。これを建物の遺跡としたチェコ人のこと、審美眼がたつて修復されていなければおかしい。プラハ城や旧市庁舎といった古い建物がたつてはいない。この街にはアールヌーボー、アールデコなどいろいろな様式の素晴らしい建物がいっぱいある。「プラハの美しさは歴史という形で残されている。建物は強くないから」とストゥクタは言う。

アートだけの1週間が過ぎ、私はリアレンジすると同時に残れ残っていた。帰りの機中ではお土産のスケッチブックとパスポートを引っ張り出し、美術館周辺の小さな作品展覧会を観て、その感想を聞いた。感想で最高のお土産だった。そして家に帰ってから、自宅から眺めるようにアート教室がある